阿部麻衣子　フォーラム八戸

数年前、子どもの頃から通い詰めていた本屋兼DVDレンタルショップが閉店した。ここで映画のDVDを借りて観まくってるうちに社会人となり、地元八戸の映画館に就職した。仕事帰りにも立ち寄り、気になる本を幾度となく購入してきた。私の人格形成に多大な影響を与えたその店が閉店し呆然としていた時期に、中心街に『八戸ブックセンター』なるものができたらしいということで足を運んでみると、天井が高く開放感のあるスペースに、馴染みのある雑誌や文庫本から、これまで学校の図書室などで見てきた薄汚れたものとは違う、真新しい専門書が並んでいて圧倒された。全国でも珍しい市営の書店らしい。売れ筋のものだけではない、様々な本が手に取れるのはとても嬉しい。やはり本は手にとって悩みたいし、他の棚に目を移すと何か発見があるかもしれない。

こうして暗雲立ち込めた私のオタク生活に一縷の光が射したわけだが、それだけでは終わらなかった。ある日、八戸ブックセンターさんから私の職場であるフォーラム八戸に《ブックサテライト》の企画が持ち込まれたのだ。市内の飲食店や小売店に小さな木箱の本棚を設置し、書店や図書館以外でも本に親しめる場所をつくるというものである。話し合った結果、映画館には関連グッズ売り場もあるため本を販売しようということになり、少し形を変えて市民の方々に本と接してもらおうということになった。上映中、上映予定の映画関連本を1か月ごとに八戸ブックセンターさんに選書してもらい、地元書店の木村書店さんから映画館に本が納品される。映画館で映画を鑑賞した後、関連本が売店に並んでいたら、つい手にとってしまう。じつにシンプルで良い考えだ。

映画と本は切っても切れない関係だとは思っていた。本が映画化されたり、逆に映画がノベライズ化されたり、映画の脚本が本になったり。映画に出てくる台詞が何かの本の引用だったりすると、劇中に登場するその本が気になってしまうこともある。本に出てくる映画を観たりすることも。八戸ブックセンターとフォーラム八戸、どちらにも興味を持って足を運んでくださる皆さんを更に楽しませたい。本と映画を同時にお薦めすることに今やりがいを感じている。

電子書籍が一般的になってきたこの時代に、八戸ブックセンターさんが地方ではなかなか需要のない専門書などを取り扱い、八戸の利用者が実際に本に触れられる、手元に置けるように販売する取り組みは、地方の郊外型映画館では上映されにくい、アート系映画と呼ばれる映画も上映しているフォーラム八戸の在り方に通じるものがある。商業的に成功した作品ばかりが面白いとは限らない。個人の人生経験によって作品の感じ方は変わるものだから、皆さんには自分に合う多くの

作品と出会っていただけたらと願う。

本や映画で楽しさや感動、精神的な安らぎや、時にはスリルを享受し文化的な生活を送ると、人は想像力を育み、相互の思いやりによって繋がっていく。ひいては平和にも繋がるわけだ。壮大な話になって気恥ずかしくなってきたが、平和の一助となる場所が八戸にはある。

阿部麻衣子　maiko abe

フォーラム八戸

ブックサテライト増殖プロジェクト（2019〜）
「本で旅をしよう」（2020）

フォーラム八戸マネージャー。売店で販売する本の充実を図り、フォーラム八戸・木村書店・八戸ブックセンターをつないでいる（ブックサテライト増殖プロジェクト）。フォーラム八戸ファンクラブが発行している「かわら版」で“マイ子の映画絵日記”を連載中。